



D

DESIGN

ピエール・ポランの幻の家具と、谷口吉生の
初期建築の奇跡の出会い。

November 19, 2022 | Design, Architecture | casabrutus.com | photo_Satoshi Nagare text_Mari Matsubara editor_Keiko Kusano

1950年代以降のモダニズムを牽引したフランス人デザイナー、ピエール・ポランの家具が、近年修復を終えた谷口吉生のデビュー作〈雪ヶ谷の家〉で、この10月に特別に公開されました。その模様をレポートします。



谷口吉生が、自身の事務所「計画・設計工房」を設立し取り組んだデビュー作〈雪ヶ谷の家〉中庭に設置されたピエール・ポランの家具。105cm四方の4つのシートモジュールとテーブルトップで構成されたピエール・ポランの《マイアミ・テーブル》が、白タイル壁の規則性と対応する。



玄関からまっすぐ正面に見える中庭に、ピエール・ポランのモジュール家具が置かれた。

《タンチェア》や《リボンチェア》など、モダニズムと未来的デザインを象徴する作品で一世を風靡したピエール・ポラン。彼が生前にデザインしたものの実現に至らなかった家具が近年新たに製作されており、そのお披露目が東京で関係者に向けて行われた。

場所は巨匠建築家・谷口吉生が設計し、近年修復されたばかりの邸宅〈雪ヶ谷の家〉。ほぼ同時代を生きた東洋と西洋・ふたりの天才が時を経て、建築と作品を通して邂逅するという、夢のような企画が実現した。



ピエール・ポランとは？

1927年パリ生まれのデザイナー。エコール・カモンド校で家具作りを学びながら、イームズやサーリネンのモダニズムに惹かれる。58年からドイツ「アーティフォート」社のデザイナーとなり、《タンチェア》や《リボンチェア》などのアイコン的なモデルを次々と発表。67年「モビリエ・ナショナル」からの依頼でルーヴル美術館の家具デザインを請け負い、68年からエリゼ宮（大統領官邸）の家具・インテリアデザインのリノベーションに従事。

70年大阪万博ではフランス館のため、トリコロールのソファ《アンフィス》などを手がけた。90年代から南仏セヴェンヌで暮らし一線を退いていたが、2008年に未完のデザインをセルフプロデュースする意志を表明し、妻や息子など家族とともに〈ポラン・ポラン・ポラン〉を設立。2009年6月没。 ©Archives Pierre Paulin



リビングからの眺め。栈のない嵌め殺しのガラス窓から中庭を臨む。



中庭で《マイアミ・テーブル》に腰掛けると頭上に広がるのは青空のみ。「まるでジェームズ・タレルの作品のよう」と、展示会を企画した〈ポラン・ポラン・ポラン〉のアリス・ルモワースは語った。

〈雪ヶ谷の家〉とは？

丹下健三研究室での10年間の勤務を経て37歳で独立した谷口吉生が、自身の事務所「計画・設計工房」を設立し取り組んだデビュー作。1975年竣工、RC造の2階建住居。竣工から40年以上が経ち、2019年に新たな持ち主が、当時手がけた谷口吉生（協力：飯田善彦）と水澤工務店に依頼し、修復が完了した。

敷地はいわゆる旗竿型で、表通りに面した門扉から細い路地を通った奥に玄関があり、そのまま直進するとほぼ正方形の中庭に出る。その中庭を居住空間がL字型に囲むという構造だ。14cm角の白タイル貼りの壁に囲まれた中庭を、どの部屋からも臨むことができる。

この家が建つ雪ヶ谷は、かつての東京の郊外に私鉄が建設された時、住宅地として開発された場所である。当時、周辺は以前からの木造住宅と建ち始めた新しいコンクリートの共同住宅が混在し、雑然とした景観を呈していた。このような場所の路地の奥に、住宅を設計するに際して、新しい生活空間を内側に向かって展開するコートハウス形式を採用した。（中略）

家の窓から中庭を見ると、同色のタイルで裏表を覆われた立方体が屋根のない居間のように見える。一方、中庭の壁に開けられた開口部を通して内部を見ると、居間は外部空間のようにも見える。視点によって内外の関係を入れ替わらせることにより、次第にその境界は曖昧になり、無限に広がるような空間をこの小住宅の設計に意図した。（谷口吉生／住宅遺産トラスト <https://hhtrust.jp/>より）。



中庭に敷き詰められたタイルは隅々まで収まりがよい。



洗面台とバスルームも白タイルで統一されている。

●ピエール・ボラン、幻のプロジェクトとは？

1968年から72年にかけて、ピエール・ボランはハーマン・ミラー社のための家具プロジェクト「ピエール・ボラン・プログラム」に取り組んだ。これはモジュールによってデザインされた家具で、住人自身が居住空間に合わせてモジュールを組み換えることができるという画期的なアイデアだった。

ところがオイルショックの影響と、市場展開のリスクを鑑みてハーマン・ミラー社は生産を断念。ボランが作った模型だけがアーカイブとしてフランスの〈ポンピドゥー・センター〉に收藏され、家具自体が生産されることはなかった。ボランは逝去の前年の2008年に、とある鼎談でこのプログラムをもう一度実現させたいと熱く語っていた。



玄関から半階分上がった吹き抜けのリビングに設置されたモジュール家具《Dune & Tatami（デューン＆タタミ）》は1968年に構想された「ピエール・ボラン・プログラム」にあったプロダクトのひとつ。70×70cmのモジュールを20個、床に敷き詰めた。さらに階段を上ったフロアに寝室、子供部屋、バスルームなどがある。

1 / 3



《デューン＆タタミ》は配置や組み合わせを自由に変えることができ、背中合わせに腰掛けたり、寝そべったりして過ごせる。家具そのものが空間を作り上げるというボランの先進的なアイデアを象徴する作品だ。

2 / 3



「設置してみると、偶然にも《デューン》の高さと窓の高さが一致したのにも驚きました」とバンジャマン。

ピエール・ポランの積年の願いを叶えたのは、妻のマイアと息子のバンジャマン、バンジャマンの妻であるアリス・ルモワースによって**2008年**に設立された〈ポラン・ポラン・ポラン〉。ピエール・ポランの作品の流通、開発、保存を行うために組織された家族経営の企業だ。

〈ポラン・ポラン・ポラン〉は「ピエール・ポラン・プログラム」の一連の家具と、ジョルジュ・ポンピドゥー大統領時代のエリゼ宮（大統領官邸）のために作られた家具の復刻、**80年代**の限定生産品の復刻を主軸として、南仏に自社のアトリエを構え受注生産にに応じている。



2019年にボルドーのルモワース邸で行われた展示の様子。この家を設計したレム・コールハウスの監修の元にポランの家具が設置された。©Marco Cappelletti

家具は人間に近い存在であり、住居の中にあってこそその魅力を伝えられると考えた〈ポラン・ポラン・ポラン〉は**2019年**に、アリスの実家であるフランス・ボルドーの〈ルモワース邸〉でピエール・ポランの家具の展示を行い、大きな話題となった。ちなみにこの家はレム・コールハウス設計で、アリスの母エレヌ・ルモワース（＝カラリストとして**70年代**にピエール・ポランと協働した人物）が現在も住んでいる。

居住空間の中でのポラン復刻作品のお披露目の第2回目として選ばれたのが、日本の〈雪ヶ谷の家〉だった。いったい、どんな経緯だったのだろうか？ 展示会のために来日したバンジャマンとアリスに話を聞いた。



来日したバンジャマン・ポラン（右）とアリス・ルモワース（左）のカップル。

「〈雪ヶ谷の家〉の持ち主が修復を終えた家に合う家具を探している時にピエール・ポランに興味を抱き、私たちにコンタクトを取ってきました。パンデミックの最中でしたので私たちは一度も顔を合わせることなくオンラインでやりとりを重ね、そのうち、この家を会場として展覧会をするというアイデアに行き着いたのです。

調べていくと、ポランと谷口の不思議な接点がいろいろ見つかりました。まずこの家が建てられた1970年代はまさにポランがインダストリアルデザインの世界で活躍していた時期と重なります。そしてこの歴史的遺産である家が修復・保護されたことと、ピエール・ポランのデザインを現代によみがえらせたいという私たちの姿勢に共通点を感じました。

さらに、ポランは日本文化が大好きだったんですよ。日本の家具メーカー『ホウトク』と技術提携していたこともあり、ポランは何度か来日しています。80年代半ばには幼い僕を連れて日本に行くこともありました。父は特に日本の古建築のシンプルな美に魅了されていました。 unnecessaryなものや過剰な装飾がなく、エビデンスが感じられる要素のみで成立している日本のデザインのミニマルさ、感覚的なところに惹かれ、そうしたセンスを自身の仕事にどう取り入れようかと考えていました」



《タンチェア》1963～1967年。© Paulin Paulin Paulin



《リボンチェア》1966年。© Les Archives Paulin

1 / 2

2 / 2

「谷口は日本を出てアメリカに渡り、一方でポランは1970年の大阪万博でフランス・パビリオンのための家具を作りました。この万博のプロデューサーを務めたのは谷口の師匠である丹下健三ですね。それに、1967年にポランの家具《タンチェア》をコレクションした最初の美術館は〈ニューヨーク近代美術館〉で、後年、その増改築プロジェクトを手がけたのは谷口吉生です。ふたりは実際に会うことはありませんでしたが、その精神は繋がっていたと感じます。そんなわけで、縁の深い日本で、谷口が設計した家でピエール・ポランの展覧会ができることを大変嬉しく、ほかにはない最高の選択肢だと思っています」（バンジャマン・ポラン）

●よみがえったポランの家具。



《Alpha Chair (アルファ・チェア)》1969年〜73年、エリゼ宮のための家具シリーズのひとつ。フランス国家が所有する建築の家具製作・保管を担う「モビリエ・ナショナル」が製作し、一般に流通しなかったものを復刻。体が埋もれすぎず、驚くほど座り心地がいい。エリゼ宮で使用されたものはオリブがかった茶色だったが、雪ヶ谷の家に合うよう、白いブークレ素材の張り地のものを搬入した。

1 / 2

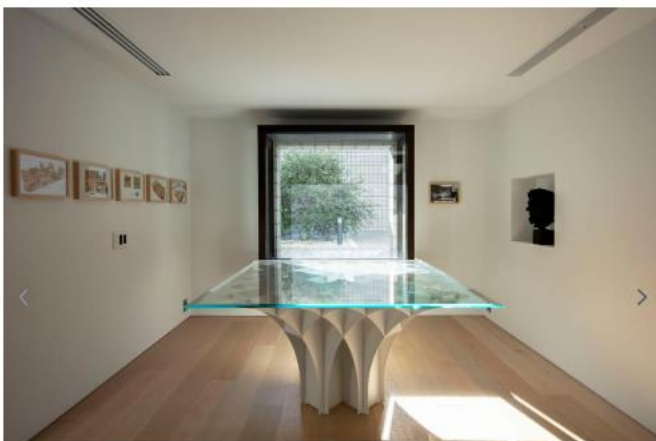


《Elysée Table (エリゼ・テーブル)》同じくエリゼ宮のために作られたテーブルの復刻。4弁の花びらのようなテーブルの脚や、《アルファ・チェア》の花のような見た目は、植物からのインスピレーションと同時に、日本の家紋に影響を受けたのではないかとバンジャマンとアリスは解釈している。ポランの本棚には日本の家紋や折形の本が並んでいたからだ。

2 / 2

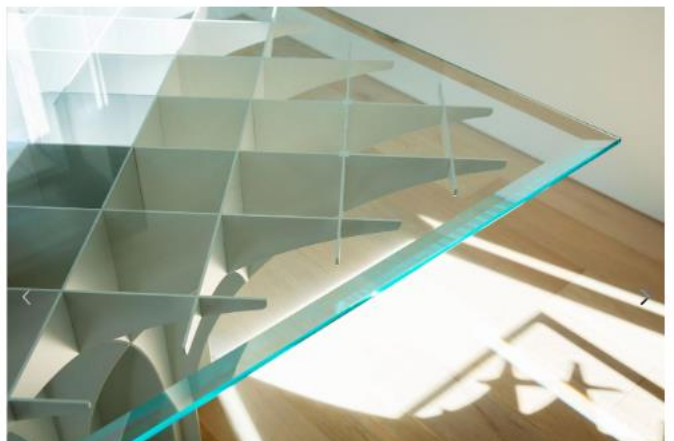


《Elysée lamps エリゼ・ランプ》1972年にエリゼ宮のために開発されたランプ。これも植物からインスピレーションを得て、長く伸びた茎の先に葉が広がるようなイメージで作られた。



《Table Cathédrale (カテドラル・テーブル)》1980年代初頭、「モビリエ・ナショナル」と協働して限定生産されたテーブル。脚はアルミニウム製のブレードを精密に組み合わせてあり、とても軽い。

1 / 2



《Table Cathédrale (カテドラル・テーブル)》部分。コンピューター導入以前の時代にポラン自身が複雑な構造を手描きで起こし、脚の立ち上がりがゴシック聖堂の交叉アーチを思わせることから《カテドラル》と名付けられた。ポランは70年代には工業的なメーカーと盛んにタッグを組み、量産プロダクトのためのデザインを数多く提供したが、80年代以降はものづくりの純粋さや職人の手仕事に立ち返るべきだと方針転換し、数量限定や一点ものの家具を作るようになっていった。

2 / 2



《Miami Tableマイアミ・テーブル》「ピエール・ポラン・プログラム」から生まれたこのテーブルは、105×105cmの4つのシートモジュールを、テーブルトップとその脚で連結させたもので、屋内外で使用可能。〈雪ヶ谷の家〉では中庭に設置された。



《Chaise d'homme（シェーズ・ドム）》ブナ材のアームチェア。リビングから半階分下がった書斎に設置された。座面は籐編み。1981年にポランが「モビリエ・ナショナル」と組んで製作した最初のモデル。これらはヴィンテージ品で、〈ポラン・ポラン・ポラン〉はまだリプロダクトを手がけていない。背もたれの中央には寄せ木細工で模様が表されており、木工家具職人の高度な技が光る。

「私たちはヴィンテージ品にフォーカスしているのではなく、ピエール・ポランの未完の家具を現代によみがえらせることを目的にしています。つまり過去の遺産として懐かしむのではなく、現代に生きる家具として再生させるということです。私たちがリプロダクトする数量は少ないですが、ポランの思想やインテリジェンスに満ちたコンセプトを、その価値を理解していただける方に忠実に伝えることが大事だと考えています。

18、19世紀に作られたものは非常に大切に保護される一方、1970～80年代のものは案外と軽視される。その傾向は建築やデザインに共通していると言えるでしょう。そういった意味で〈雪ヶ谷の家〉が解体の危機をまぬがれて修復保存され、ポランの幻の家具がよみがえったことはとても意義深いことで、両者を融合した展覧会を行えたことは、最高のオマージュになったと考えています」（バンジャマン＆アリス）